



大石仁美

先日、面白い出来事がありました。以前よく利用してくれていたお母さんから電話があり「あのーそちらはやっぱり小学校4年生というのは無理でしょうねえ。」と恐る恐るおっしゃいます。お母さんは変則勤務で、どうしてもその日は休めないらしく、「おねがい、今日一日だけお留守番してちょうだい！できるだけ早く帰るから」と発熱で臥せている息子に言ったところ、「いやや、子どもサポートがあるやろ。」と言って聞かないんだそうです。小学校3年生までしか利用できないことを知りながらも「じゃあ聞かだけ聞いてみるからね。」と電話をされた次第。たまたまその日は他の利用者がなかったこともあり、小さいころから、甘えん坊の泣き虫さんだっことを思い出しながら、まあいいか、と引き受けることにしました。

しばらくして、今度はお迎えの依頼電話が入りました。小学校へのお迎えです。3年生の男の子が、37℃の発熱？で保健室で臥せているとか。ん？と思いながらも迎えに行くと、電話で依頼を受けた子どもではなく、一つ年上のお兄ちゃんの方でした。名前がよく似ているので、どうも連絡した先生のほうが間違えてお母さんに伝えたようでした。

奇しくもその日、小学校4年生の二人が、普通ならあり得ない時間にありえない場

所で出会ったのでした。

「学校どこや？」「塾行ってるんか？」「俺、勉強より工作の方がすきや」「俺、空手習ってるで。ドヤーツ」

身振り手振りで賑やかなこと。

この子らほんまに熱あるんかいな。だいたい37℃で熱なんておかしいし、測ってみたら36℃台、聞いてみると、体育で走ってしんどかっただけとか。「今から学校へ送り返してあげる」「いやや」とおどけてみせるやんちゃ坊主のかわいい顔をみながら、いつも頑張ってる疲れしているんだろうし、まあいいか、とってしまう私でした。いまの小学生はホンマ疲れているんです。

もう一人の方も、たいしたことはなく、キーホルダーづくりやプラバン工作に誘うと、生き生きとして、楽しんでいました。

この二人、一度聞いたら忘れないほど立派な名前の持ち主です。

「おい、またどこかで会おうな」

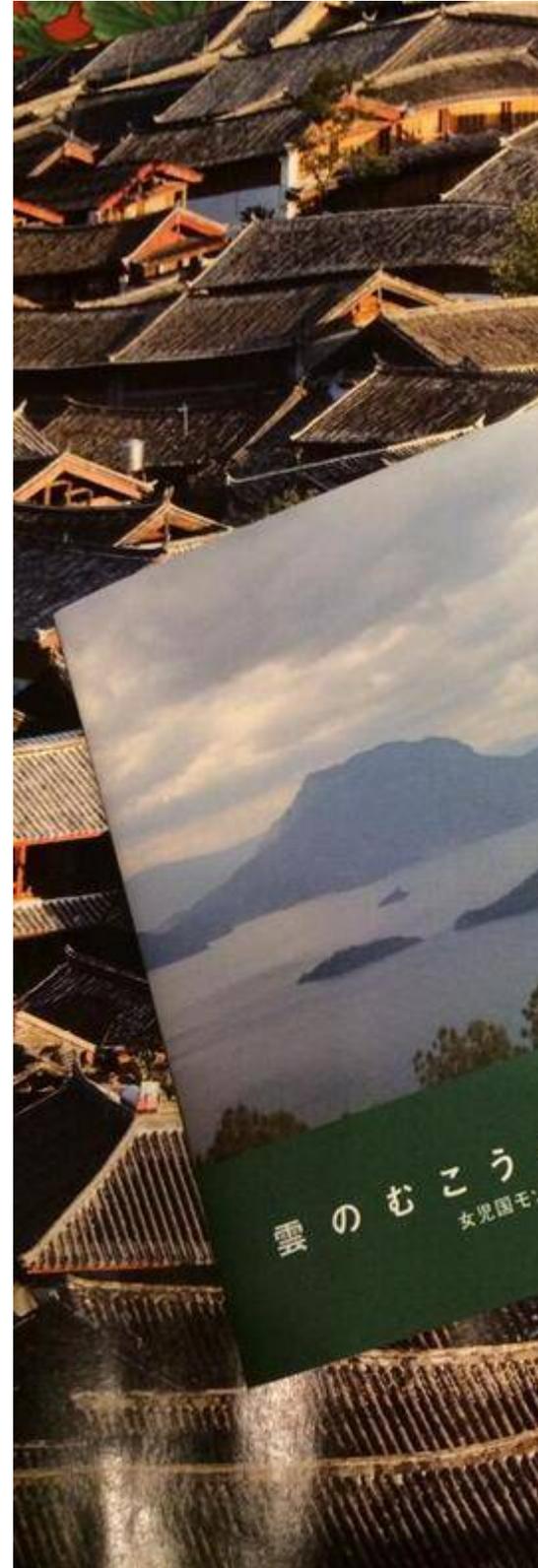
そう言い合って、不思議な余韻を残して帰っていきました。

村本邦子

5月の連休、中国雲南省と四川省の境界に暮らす世界で唯一母系制が残るとされるモソ人の村を訪ねた。財産を女たちが引き継ぎ、通い婚。子どもは母の属する大家族で育てられ、男も女も一生自分の生まれた家で暮らす。おばさんたちがみんな母親で、おじさんたちがみんな父親である。経済と恋愛を完全に分離するので、カップル関係が破綻すればあっさり別れるが、子どもの養育環境はまったく影響を受けない。非常によくできたシステムで、世界中がこのシステムを採用すれば、戦争なんて起こらないのと思う。電気だってほとんど使わないのだ。

それでも、大きな時代の波には逆らえない。今回、上海から3時間半、麗江から車で8時間かけて行った所へも、来年には飛行場ができ、3年後

には高速道路が通るといふ。あつという間にこの特別なシステムを維持することは難しくなるだろう。星新一の『人民は弱し、官吏は強し』（新潮社）を思い出した。『明治・父・アメリカ』（新潮社）と合わせて読むと、さらに衝撃的だ。今回書いた原稿もしかり。なんだか哀しくて悔しい。



國友 万裕

今、ぼくは悲しみのまったなかにかいます。これだけ悲しいのは何年ぶりでしょうか。

これまでの連載にも書いたことがありますが、ぼくは2年前からあるマッサージ師の人にボディ・メンテナンスに来てもらっていました。週2回です。だから、相当お金はかかっていたのですが、とにかく身体がしんどいし、彼は、マッサージだけではなく、友情も与えてくれていました。

引越しの手伝いもしてくれ、怪我をしたときの世話もしてくれました。去年の夏は須磨と一緒に海水浴にも行きました。水のなかでプロレスごっこをしたりで、子供の時代に帰れて、本当に楽しかった。他にもたくさん楽しい思い出をあたえてくれました。

その彼が体調が悪いとのことで、ドタキャンが2回ほど続きました。その後、1週間、ぼくは毎日のようにメールしたのですが、返事はなく、電話をしても出てくれません。まったくの音信不通です。1週間たって、ついに心配になって、彼からもらっていた名刺を頼りに彼の自宅まで行きました。しかし、電気は消えていて留守でした。近所のお菓子屋さんでお見舞いを買って、彼の家の玄関において、帰りました。

これでおそらくメールはくるだろうと思いましたが、ところが、やはり連絡は来ないのです。常識的に考えれば明らかに変です。ぼくのところにマッサージに来るのが彼の日課になっていたはずですし、彼とぼくはお互いに「衝撃の出会い」と語り合っていました。ぼくのほうはどうしても欲しかった少年時代を取り戻すための友人がで、彼はお金に困っていたので、ぼくのことを神様みたいだとまで言うてくれていました。それが、喧嘩した覚えもなく、何の前触れもなく、いなくなるなんて。

まるで猫のようななくなり方です。一体、彼に何があったのか。心配で、心配で、何度もメールしたのですが、メールも電話も何も帰って来ないということは、彼はぼくと会えない事情があるのでしょうか。人間だ

から、突然、人には言えない事情が生まれることはあります。しかし、彼はこの2年間、ぼくを心身ともに癒してくれていたし、「俺たち、一生の友達だよ」とお互いと言っていた仲だったので、心に空洞があったような気持ちです。

彼は、また戻ってくるでしょうか。それとも、これが永遠の別れになるのでしょうか。戻ってきて欲しいなあ。とりあえず、しばらくは騒がず、待ってみます。戻ってくれば、いつだって歓迎だよというメールを出しておきました。

会話は別れの始まり。人はぼくの人生にやってきては去っていきます。さよならだけが人生なのでしょう。切ないですね。

北村真也 私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

マガジンも気づけば17回、早いものです。関係者の皆様ご苦勞様です。

さて私達のアウラ学びの森のホームページが、この度更新されました。ぜひみなさん、のぞいてみてください。あわせて、文科省の研究事業で何とかまとめた「不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス」、ご希望の方には郵送させていただきますので、ご一報ください。

古川秀明

家族塾もなんとか二年を超えられた。石の上にも三年ということわざがあるが、続けるうちに様々な問題に直面するようになってきた。いくつもの課題をひとつひとつ乗り越えて行くしかない。時に道に迷うこともあるのだが、どれも自分自身の成長の課題として受け止め、家族塾の家族と一緒に講師全員が成長できればいいと思う。

団士郎

昔、公務員をしていた頃、自分ではそれ程意気込んで仕事をしているつもりでもなかったが、結果的にはかなり頑張っ

ていた。無理していたわけではないので、だからどうという事もないのだが。

新しいことや先進的取り組みを次々具体化して、京都府の評判を上げていると思っていた。中間管理職になってからも、児相職員の成長や精神的サポートにいろんな工夫をしていたつもりだった。

でも、そんな風に評価してくれる上司にはなかなか会えなかった。同僚達からは支えて貰っていたから不満はなかった。だが人事異動で、業務成果など関心はないとでも言いたげな、年功序列通りの昇進赴任先の内示があってガッカリさせられ、ひと騒ぎしたこともあった。

それが今は、誰かから評価をされる立場でもないが、世の中全体から、とても良くして貰っているように思えてしかたがない。したいこと、出来たら嬉しいこと、実現したらいいなあと夢見ていたことなどが、ドンドン現実になる。一緒に活動する人たちにも恵まれて、本当に報われているなあと思う。だからこの世界は捨てたもんじゃ無い、信ずるに足るぞ！と思える。

ちょっとした思いつきで騒ぐ困った人は昔からいたし、それに付和雷同する人もいた。自分を売り出す手段として、利用できるモノは何でも散らかし放題の人にも会った。そのために酷いことになった事もある。

でも、いつもみんながそうだったのではなく、そんな失敗の後始末を引き受けて、立て直して尽力する人がいた。その力の集積が今の世の中だ。組織から距離を置いて働くようになって、自分の中にそういう役割を担う準備が出来たような気がする。

坂口 伊都

娘が中学に入学して、約2か月。だいぶ慣れてきましたが、最近不機嫌なことが多い、私は娘に八つ当たりを受けています(笑)娘はバスケットボール部に入部したのですが、練習量がとても多いらしく、卓球部の兄よりも遅れて帰ってきます。「あー、土日嬉しくない。練習がある。休みがないよお、休みたいよお。」とつぶつぶ言っています。息子が中学に入った時は、卓球に目覚め、寝ても覚めても卓球がし

たいと言っていたので、ずいぶんと違うもんだなあと思って眺めています。

そんな娘を見ていて、私も練習がきついソフトボール部だったなあと思い出しました。ソフトボール部は、野球部の次に練習が多くてサッカー部よりも長く練習をしていました。次々に終わっていくよその部を羨ましく思いながら、まだ終わらないのとおと日々思っていました。1年生の頃は、帰ったら風呂入って寝る生活。別にソフトボールに興味があるわけでもなかったのに、試合を見ていても楽しくないし、冬でも海岸までランニングして筋トレをしていました。砂浜で裸足になって走ったり、砂を入れた缶にひもをつるして巻き上げたり、腕立て伏せなんかもしていました。よく辞めずに続けたなど中学生の私を褒めてあげたいものです。そのご褒美でしょうか、中学で20cm程身長が伸びました。

子どもを育てながら、自分の子ども時代が甦る経験は何回もしていますが、子どもの成長と共に自分が思い出す子ども時代も大きくなるのですね。まあ、自分で決めた部活ですから、頑張ってもらいましょう。バスケットが楽しくなるといいのにねと思う親心でした。

浅野 貴博

海外で暮らす中で、日本での生活と比べ、不便に感じることを挙げたらきりがありませんが、その中には、事前に想定できることと、実際に暮らしてみても初めて分かることがあります。前者には、例えば日本食が手に入りにくい、手に入ったとしても割高であることなどがあります。一方、後者にも様々なことがあります。日本人だけでなく、韓国や中国などの東アジア出身の留学生の多くが共有できる悩みには、'Haircut'があります。一般的に東アジア人の毛髪は、毛髪自体が太くてボリュームがあり、直毛であるのに対して、欧米人の毛髪はボリュームが少なく、カールしているという特徴があります。そのため、美容師の方に言わせると、東アジア人の髪のカットの方が技術が要るようです。こちらのヘアサロンで、東アジア人の髪のカットに慣れていて上手な美容師を

見つけるのは容易なことではないため、私の知り合いの日本人女性の中には、日本人の美容師にカットしてもらうために、ロンドンまで行く人もいます(※ロンドンまでは特急で約2時間掛かります)。しかし、そこまでする余裕のある人はなかなかいないので、実際には、近辺のヘアサロンで我慢するか、自分でカットするか、または、家族や友人にカットしてもらうかになります。私の場合は、大学の近くにあるヘアサロンを利用したり、妻にカットしてもらったりしていました。幸いなことに、妻はとても器用なので、私だけでなく子供達の髪もそれなりにカットできるのですが、友人の中には、奥さんにカットしてもらう度に、悲惨な状態になっている人もいます。そんな時は、そのことに触れないでおくか、「Not bad!(悪くないね)」と当たり障りのないコメントをするしかありません。しかし、最近ようやく、私のHaircutの問題が解決されました。日本人の美容師の女性で、イギリス人と国際結婚された方を知り合いから紹介されたのですが、その方はヘアサロンに勤めているわけではないので、ご自宅に伺って、リーズナブルな値段でカットをしてもらっています。日本で生活していたら当たり前のように受けられるサービスに対しては、海外生活ならではの感謝を感じています。

河岸 由里子

助産師さんの赤ちゃん訪問の話。

ちょっと前なら、出来るだけ母乳を推奨してきしたが、最近は真面目過ぎるママたちが、母乳にこだわるあまり疲れてしまう。その結果母乳が出ず、産科で受けたアドバイスでは「足りない時はミルクを40から60cc位足してください。」と言われて60cc以下を守る。赤ちゃんはお腹がすいて泣き続け、ママはオロオロしながら泣き続ける我が子を抱き続け更に疲れ切っている。そこで、助産師さんは「もう少しミルクを飲ませて、一度お母さんが休めるようにしましょう」と言う。赤ちゃんはミルクをたっぷり飲んで泣き止み、ママも一息できた。その後のフォローでも、ミルクを上手く使いながら、何とか対処できるようになっている

と聞いてほっとしたのだが。「私はミルクを勧める助産師になってしまったようで、これで良いのかと悩む。」と。

ママが疲れ切っているにも祖母は何も言わないそうだ。一言「ミルクを足したら」と言ってくれたら、こんなことにはならなかったら。

一方で、初乳もそこそこに、すぐミルクに切り替え、泣くたびにミルクを与え、体重増加が多すぎて管理になるケースもある。

もちろん、問題なく育児が出来ているケースが殆どで、検討に上がってくるケースばかり見ているから「未来は大丈夫か？」と心配になってしまうのだが、それでも長く赤ちゃん訪問を続けている助産師さんの言葉を聞いていると、様変わりしつつあるママたちの様子に、「一体何がいけないのだろう・・・？」と思う。

こんなことを考えながら、また今日も様々なケースと向き合う。

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

岡崎 正明

通勤の車中。よくあることだが、運転しながら無意識に歌を口ずさんでいた。

「う～すべに色の～♪」

(なんでこの歌が急に出てきたんだろ? ..まあいいか。それにしても良い歌だよな。題は..ハナミズキ。そうそう。ん? 歌手の名前なんだっけ? えーっと...確か台湾生まれかなんかで..映画とかも出たりして..。ほらほら、たしか..)

頭の中で独り言。顔は映像がすぐに出てきたが、名前がどうしても出てこない。

(台湾系だから、確か上が漢字1文字で、下が2文字のはず。「〇 〇〇」みたいな。そうだそうだ。...えー「陽 岱鋼」は日ハムの選手だし、「桂 銀淑」は違うくて..「江沢民」「余 貴美子」「ペ ヨンジュン」「マンボンギョ」って、すでに人の名前ですらないぞ。落ち着け..)

一度こうなるともう駄目だ。アリ地獄のように抜けられなくなる。しかしどうにも悔しい。なんとか自力脱出を試みる。

(なんか「陽 岱鋼」が1番響きが近い気

がする…。こりゃや行だな。えっと「吉 幾三」「やく みつる」…イカンイカン。離れてきた。台湾だ、台湾。「リン チーリン」とか「陳 健民」とか。そんな感じのはずだ…。落ち着け。大丈夫だ。もう一度整理して…)

冷静にと思えば思うほどドツボにハマる。我慢できず、ついには妻に連絡する誘惑に駆られたが、意地でそれを止めた。…職場に着くまであと30分。それまでに間に合うか?…よし、絶対勝つ!(誰に?)

だがその後もどうしても抜けられない。「陽 岱鋼」と「余 貴美子」が交代でグルグル回る。やはりや行がくさい。終盤はだんだんおかしき方向に。「宗 茂」「甲斐バンド」。思い浮かべては1人で爆笑。もはや本題どころではなかった。

残念ながら思い出せないまま職場に到着。…負けた。

同僚にそれとなく聞いてみる。アッサリ「一青窈(ひとと よう)のこと?」。

「あ————! そっちかあ〜」

短信は何を書いてもいいと聞いたが、本当にこれでいいのだろうか。

P. S. 皆さまからのご意見・ご感想を受け付けております。

buiimen0412@yahoo.co.jp

三野 宏治

* 本連載の間違いについて

連載の3回目「一福祉の概念・言葉の解釈について③「自立を支援する-2-」

<http://humanservices.jp/magazine/vol8/26.pdf> で、「精神障害者ホームヘルプサービスが障害者自立支援法では訓練等給付事業のなかに位置づけられている。」と述べ、その上で論考をすすめた。しかし、障害者自立支援法における(精神障害者に関するもの)ホームヘルプサービスは介護給付である。この間違いは筆者の「なぜ精神障害者ホームヘルプサービスは訓練の要素が強いのか」との問いに「訓練等給付であるからだ」というある支援者の発言を確認せぬまま記述したこと由来する。しかし、由来がどのようなものであれ、「法的な根拠を確認せず記述し発表した」ことの責は全て筆者にある。

今後の対応については然るべき協議の元、対処をしたいと考えるが、まずもって連載に関する間違いについて報告します。

鶴谷 圭一

今年から沼津市私立幼稚園協会 協会長になってしまいました。

協会長になると、市内のいろんな会合に加えて、県の幼稚園協会の会合にも出席しなければなりません。

交通安全、要保護児童連絡協議会、教育関連の会議、子ども子育て会議、幼保小連携会議、各種理事会、委員会や研修会などなど、こんなにたくさんの会が存在していたことすら知らなかったものもいっぱい。あーあ、会議に時間が取られるって、こんなに仕事が詰まってしまうんだと実感しつつやっているこの頃です。

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

千葉 晃央

ミニ連載:

■私がしている文章の書き方 6 ■

私がしている文章の書き方の連載6回目です。

大きな6 手順

- ①箇条書きでいいことをかく
- ②丁寧に膨らませて文章にする
- ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
- ④接続詞等、つながるように加筆
- ⑤「です」「ます」、「である」の判断
- ⑥音読で確認
- ⑦黙読でも確認

今回は⑥音読で確認

できた文章を今度は音読します。人間は読んでいるものに対して補正機能が働きます。文章の各所を間違えていても前後の文脈から補正するのです。黙読しているだけでは気づかないで、音読して初めて気付くことも多いです。

絶対間違えてはならない、国家にまつわる文章を扱う人たちは、二人一組で向かい合い同時に音読をする。しかも、文章

を音読時にも補正しないように文章を後ろから、つまり逆から音読をして、意味のない文字の羅列としてとして、扱って音読をして間違いがないか確認すると聞いたことがあります。

そこまでできなくても、音読することで、繰り返しをしすぎている表現、文章のリズムなど改めて新鮮に見直すこともできます。この作業は、自宅など周りの環境を整える必要がありますが、これを省くと、結構後悔することもあります。今回は最終回⑦ 黙読でも確認 です。とここまで書いて、これも音読で確認!

大川 聡子

所属先で4月から准教授になりました(このような場で人事異動の報告すみません)。院生の論文を指導したり審査したりする立場になり、改めてご指導いただいた先生方から教えていただいたもの大きさに気づきます。自分も学生にそう思われるようになりたいと思いながら、日々研究計画書を読む毎日です。

大谷 多加志

最近、仕事上身近にお付き合いすることになりつつある「統計」。高校数学の時点で脱落気味だった身には、「 \int や \sum が羅列された数式は呪文にしか見えず、日々悪戦苦闘しています。そこで、思い立って母校の大学を久しぶりに訪問し、恩師に助言をお願いすることにしました。久しぶりに訪れたキャンパスが懐かしく、先生に個別指導してもらい、数々の謎が解けていく時間は、とても充実していました。“わかった!”という感覚は、何歳になってもこの上なく嬉しいものです。仕事の中に研究として取り組みたいテーマがあること、そしていつでも学び直しに行ける場があること、どちらもとても恵まれたことだと感じます。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

年度末から年度始にかけてため息がでるような疲れを感じている。お寺も社会的存在である。年度始にはいろいろな総会

が開かれる。お寺の団体もいろいろな規約が作られて、それに従って各団体が運営される。それは当然である。その規約と運営が、時にコスパの合わないように感じることもある。運営の正当化のためにとつもない労力をかける。一言ゴメンで済むことが、この一言を言いたくないために割に合わない労力を使う。運営の正当化のために、規約を作っていることもある。本来、規約は運営をスムーズにするため作るものじゃないかと思う。こうした事象は、世の中に蔓延しているような気がする。

◆一方で、人間の死に関してはコスパが要求されている。しんどいことはやりたくない。できるだけラクにお金をかけずに済ませたい。直葬や家族葬などという言葉で、人の死に関しての労力と経済力のコストは削られる一方である。

◆ため息をひとつ。

川崎 二三彦

リフォーム問題(2) 本 de 募金

私が勤務している子どもの虹情報研修センターは、類似施設が他にない全国唯一の施設であるため、全国相手に手広く業務を行っているようにも見えるけれど、実は職員数は限られており、今年(今年もまた)人事異動などなく、年度末や年度始めは静かに過ぎていった。そもそもこの時期はセンター主催の研修会も少ないため、職場全体が比較的余裕があるように見えるのだけれど、こと研究部の私に関しては、この時期がかき入れ時だ。秋から続いた外部からの研修講師依頼も年度当初は沙汰やみだし、遅れに遅れている本来業務の研究報告書作成のチャンスなのである。

単身赴任も8年目に突入り、5月の連休は、鞆にもものすごい量の資料を詰め込んで京都の自宅に引きこもり、鋭意原稿執筆に邁進するつもりだったのだが、今年は強敵に敗れなく討ち取られてしまった。

*

ご存じ(じゃないですね)、我が家を襲っているリフォーム問題がそれである。前回この欄で報告したように、我が家はリフォームに向かって邁進しているのだが、紆

余曲折甚だしく、最初に浮上した建て替え・新築案が見事に沈没した後、気を取り直して当初方針のリフォームに舵を切ったのである。

某設計事務所にリフォーム案を作成して貰うことにしたのだが、こうなると、横浜から戻るたびに狭い部屋のあちこちを回って隅々を点検し、外に出ては外壁を眺め、駐車場に立って思案し、家の傍に立つ電柱の位置も確かめる。そうして改善プランを練っては業者に要望を伝えようとすると、時間は瞬く間に過ぎていくではないか。

「ええ、ええ。私が住むわけではないですから、納得がいくまで何度でも変更しますよ」

一級建築士さんはなかなか誠実なお人柄。我々もそれに甘えてあれこれ首をひねり、次々と注文を出す。

「これで、ご希望の点は全て盛り込んだつもりですが、いかがでしょう」

「うわ、ありがとうございます。これ、いいですね」

出窓付き6畳書斎に規格外の超大型デスクをL字型に組み込み、あわよくば本箱4本ほども据え付けようというのだから、私は早くも悦に入っている。のだが……。

「ちょっと、これ見て」

妻が持ち出したのは、その後届けられた見積書。

「これだと、新築したときの建築費どころか、その倍ぐらいにはなりそうよ」

「うーん、新築費用たつてもう25年前のことだろ。確か消費税導入直前だったじゃないか」

「あのね、設計料だってまだ入ってないんだから」

「こっちは好き放題わがままな注文したんだろ。仕方ないんと違うか？」

「な、何言ってるの!? 新築ならともかく、リフォームにこれだけは出せません! だめ、絶対だめ!!」

「でもなあ、乗りかかった船だぜ」

などと言っても我が家の財務大臣が有する権限はあまりにも強大だ。決裁印が貰えないので計画は振り出しに戻ってしまう。とはいえ、玄関先を歩けばタイルが割

れているし、外壁にはヒビが入り、台所の床は微妙にきしんでいる。翻って見れば書斎のフローリングは酷くいたんでおり、備え付けの棚の寸法も生活の変化に対応不能となっているし、瓦屋根も早晚寿命が来つつあるという。またしても延々と議論が続き、原稿執筆なんぞは吹っ飛んでしまうのであった。

*

さて、こんな日々を送りながらも、リフォーム問題は少しずつ進展し、これまでなるべく避けてきた問題に、いよいよ取りかからねばならなくなってきた。リフォーム期間中の4、5か月、仮住まいを探して荷物を移動させねばならないのである。私は、書斎のイスに座る度に本棚を眺めて茫然自失。溜息ばかりがついて出る。

そしてふと思い出した。田舎の古家に残されていた亡父の本のことだ。国語教師だった父は、数種類の「日本文学全集」をはじめとして、「世界文学全集」「日本古典文学大系」「漢文体系」、雑誌「国文学解釈と鑑賞」の膨大なバックナンバーその他、読みもしないで次々買い込んで、昭和64年1月昭和最後の日に永眠したのである。

そして昨年、空き家となった岡山の実家を長らく管理している姉が、「この本、何とかしないとイケないよ」と電話してきた。大半は姉が処分してくれたのだが、私も形ばかり出かけて、おざなりに義務を果たしたのであった。



それにしても、一度手を染めれば抵抗感もなくなるということなのか、還暦過ぎた身で愚息の顔を浮かべ、自分の本もいずれは同じ運命を辿ると達観したからなのか、亡父の本の顛末を思い出して気分が変わった。

「本を手放すだと? なんて馬鹿な奴だ」

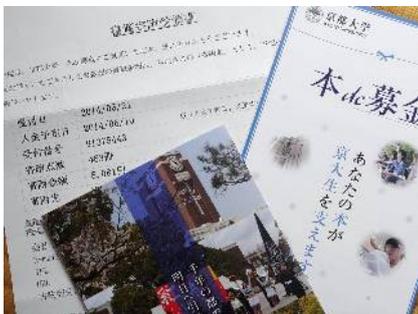
「本を手放せたと？ もういい、離婚だ」
それまではこんなことを嘯っていたのに、君子豹変朝令暮改方針転換、気づいたら、いかにして身軽になるかばかりを思索していたのである。

間がいいことに、そこへ飛び込んできたのが「本 de 募金」だ。これ、「みなさまよりご提供いただいた書籍類の買取金額が京都大学基金に全額寄付され、京都大学の教育・研究に役立てられるプロジェクト」なのである。

早速連絡した。とりあえず第一陣として段ボール 9 箱分の本を詰めてみたのだが、宛先も何も書かなくてよいし、自分でどこかへ運び込む必要もない。ネットで申し込めば、その日のうちに宅配便が集配にやって来て持ち去っていくのである。加えて結果通知も届くシステム。

それによると、寄付した本は合計 453 冊とのこと。わざわざ調べてくれるんですね。さて、出荷した本すべてを合わせた驚きの価格は 5,081 円。1 冊約 11 円の勘定だ。

思わず事務局に電話して尋ねてみた。



「これ、配送料のほうが高くていませんか？」

「えっ、あ、ハイ。ありがとうございます。ホホホ、そういうこともあるかも知れませんがね」

軽やかな返事を聞き、一体これでいいのだろうかと思いつつ、今日は LP レコードをせっせと箱詰めしているところだ。

(つづく) (2014/05/30 記)

荒木 晃子

九州へ帰郷した。7 年前、父を亡くした時と同様に、今回のお墓参りと親戚回りは昨年末亡くなった母のため。奈良の実家で行った母の自宅葬に、遠路はるばる

九州から来てくれた高齢の叔父や叔母たちと付き添いの従妹やその子どもたちにお礼を伝えるため、そして元気な顔を見せたくての訪問だ。前日通夜に駆け付けてくれた父の弟にあたる熊本の叔父は、忙しさにかまけ、連絡も入れず不義理極まりない私に、「あっこちゃんも寂しかろ〜とおもて、頑張ってお出で来たたい。お母さんに線香のひとつもあげたかもんで」(訳: 晃子が寂しいだろうと思い、頑張って遠出してきた。お母さんに線香もあげたいので)玄関先でそう言って涙した。その叔父を訪ねたかった。

福岡、熊本、佐賀と、車に母の忘れ形見の愛犬を乗せ、田舎の空気をたっぷり味わいながらの挨拶回りには、昔から一番仲の良い従妹の付き添いがある。どこを訪ねても、家族総出の歓迎と手作りの九州家庭料理のおもてなし。今春から大分の児童相談所で相談員をしている従妹の息子は新婚で、生まれただけの子どもを抱き、かわいいお嫁さんとの家族連れ。平日にもかかわらず、仕事を早退し駆けつけてくれたという。その昔、私が妹のようにかわいがっていたその子の母親は、久しぶりの再会にうれし涙をプレゼントしてくれた。いづこを訪ねても、賑やかで笑顔あふれる大家族の歓迎に、日頃感じることのない家族の団欒の中にいる安堵感を覚える。最終日には、叔父や叔母のからだを支え、荒木家のお墓参りに出かけた。目を閉じ墓前に手を合わせると、脳裏に浮かんだのは、父の隣に寄り添い微笑む母の姿。きっと、父のそばに行けたことがうれしいのだろう。父を大好きな母だったから。

名残惜しさに後ろ髪をひかれる思いで九州に別れを告げ、帰路、母の姉妹の中でもっとも母に似た下関在住の叔母を訪ねた。叔母は、古くからの臨床心理士であり、その地域初の開業カウンセラーだったことは母に聞いていた。そういえば、かつて、私が人生の再スタートを切った時、母と私の相談に乗ってくれたのは、その叔母だったことを思い出す。私は、きっと叔母の後を追いかけるように、この道をひたすら走ってきたのかもしれない。

叔母は、70 歳を過ぎた今も、昔と変わらず美しくおしゃべりな女性のままだった。いつもの笑顔で、息子(私が弟のようにかわいがっていた従弟)たちやその家族と共に迎えてくれた。その夜は、温泉宿に愛犬も一緒に宿泊できる別棟をおさえてくれていて、叔母と共に母の思い出話しながらゆるりとした時間を過ごした。久しぶりに会った叔母は当然のように年を重ね、生前の母に生き写しだった。年内には、長年勤務した大学の教授職を退官する予定だという。「退官したらゆっくり時間があるから、また遊びにいらっしやい」。その昔、まだ両親が若かりし頃、“生まれただけの私のおむつを替え、おんぶするのが大好きだった”という叔母は、そういつて見送ってくれた。

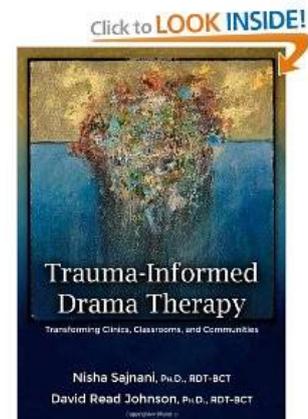
かつて、父と母が出会い、私が生まれた九州は、いまも私の故郷である。

尾上 明代

今号の執筆はお休みさせていただきました。ちょうど今、前号に書いた「自己開示劇」の上演に向けて、リハーサルの大詰めになっています。それについて、「自己開示劇 パート2」として、本番(6 月 15 日)が終わってから書きたかったのです。次号でご紹介させていただきます。

もう一つ、皆様にお知らせ(宣伝)です。トラウマを扱うドラマセラピーの本が出版されました。

Trauma-informed Drama Therapy:
Transforming Clinics, Classrooms, and
Communities



編者は、アメリカのドラマセラピスト・Nisha Sajhani と David Johnson です。

出版社：C.C.Thomas (2014年3月発行)
トラウマを扱った、さまざまな対象者や場
におけるドラマセラピー実践の報告や論
文を集めた内容豊富な英語の本です。
私も1章、執筆しています。

タイトルは、The Healing and Growth of
"Little Monsters Hurt Within"。

以前、この対人援助学マガジンに連載し
ていた「小さな怪物たちとのドラマセラピ
ー」(ある児童養護施設で行なった2年間
のセッションと子どもたちの成長記録)の
原稿をまとめ直して英訳しました。

ここでの連載を、また違った形で世に出す
ことができ嬉しく思います。

その機会を下さった、このマガジンの創
作者、団編集長に感謝しています。

木村 晃子

地域の人と一緒に、ある活動の計画を
立てている。いつも、同じ場所で定期開
催していることなのだが、なかなか来て
ほしい人に来てもらえない。どうしたら
来てもらえるのか。あれこれ談義して
いて、ふと、これまでとは違った場所で、
違った協力者のもとでやってみよう、と
話は盛り上がった。

着々と話を進め、ほぼ盛り上がった時
にイメージした内容に向かっている。
ところが、関係する主要機関から「事故
があったらどうするのだ。」こんな言葉
が出ているそう。あまり、変わったこ
とはなくてもよい、何かあった時にど
うするのか、というお決まりの懸念事
項。

「事故は、あるかもしれませんが。それ
は、その時ではなくたって、生きている
限り、事故というリスクは背負っていま
すよね。事故があった時には、その時
の最善で対応しましょう。そんな言葉を
気にしていたら、私たちは家の中に閉
じこもっているしかないのですから・・・」
そう返して、自分たちで計画しているよ
うに進めている。

「何かあったらどうするのか？」そんな
言葉で、今や未来のあらゆる可能性を
つぶすのはバカバカしい。

団体で何かする時には、極端な心配性

になって、面白くもないことを無意味に
続けて、何も世の中に生産しない。一
方、個人レベルで何かあると、「言っ
てくれば良かったのに・・・知ってい
れば何かしてあげたのに。」と途端に善
人ぶる人もいる。

リスクマネジメントという言葉は流行っ
ている。

だけどちょっと待てよ。リスクを覚悟す
ることを忘れていないか。この世の中
に、絶対なんてあるわけがない。

あらゆるリスクを引き受けながら生きて
いく。そんな潔さを持っていたい。

今年も、どんどんやりますよ。

北海道 当別町 普段はケアマネジャ
ーとして高齢者支援をしています。

藤 信子

この欄にも何回か書いたことのある、日本
集団精神療法学会の「東日本大震災関係
者の相互支援グループ」(以下相互支援
G)の委員を続けているけれど、今度新し
く東北の若いメンバー4名が加わること
になった。阪神淡路大震災以後、京都で災
害とメンタルヘルスを考えるグループを、
継続していたところに、東日本大震災が
起こり相互支援 G を始めた。相互支援 G
を始めた時に、災害とメンタルヘルスのグ
ループを企画していた3名に、ちょっと若
い委員が一人加わって3年間、4人でグ
ループを続けてきた。今後の災害をあまり
予想したくないけれど、そのようなこと
が起きた時のためにも現在の被災地のメ
ンバーが支援委員となり、コンダクターの
経験を重ねることで、「災害の相互支援グ
ループ」の継続を考えようことばを聞いて、
私がこのグループをコンダクトできる
のは、あと10年くらいだろうと考えていた
が、その後引き継いで行くシステムがで
きたことにほっとしている。そしてもう20年も
続けてきたのか、と改めて思った。

水野 スウ

ザワザワザワ、、、このところの気分
のザワつきはいったいどうしたことだ、と考
えてみたら、その最大原因が、5月の首相

会見にあったと気がつきました。

集団的自衛権の必要性を国民に説明す
るのに、あんな情緒的な紙芝居、する？
あんなに何度も何度も「命」「いのち」っ
て、言う？ 言えば言うほど、いのちが軽ん
じられてる気がした。即座には決してノー
と言えない、狭い状況を設定して○か×か
迫るやり方は、きもちのいいコミュニケー
ションとは、とても呼べないなあ。

そもそも、もめごとを力でなく対話で解決
する、と憲法にあるのだから、それを守る
べき立場の首相は、なお言葉を正確に使
わなくっちゃね、と思う。その意味からも私
、これからは、集団的自衛権、といわずに、
「集団的自衛権」って言うことにしました。
その方が、意味が伝わる。耳に易しい言
葉ではぐらかされてることいっぱいあるけ
ど、まずはこの言葉から。

前号の短信で、「後に、おおきなうんどう
=movement とよばれるものだって、は
じめは一人からだったことを思う時、そこ
に私は希望と勇気を見いだすのです」と書
いたけど、まさに、はじめはたった一人の
若いお母さんからはじまったものが、「憲
法9条にノーベル平和賞を」のムーブメン
トとなり、今年のノーベル賞にノミネート
された、という事実。希望のあかりは、み
んなで灯し続けるもの。そのあかりには、私
の分もはいつているよ。

早樫 一男

5月の連休明けから、84歳になる実母
を引き取ることになりました。認知症が緩
やかに進んでおり、さまざまなサービスを
使いながら、ともに暮らすこととなります。
認知症の母の言動からは、微笑ましさ
を感じるとともに、家族が抱えるストレス
についても強く実感しています。子育てが
終わり、子どもが自立に向かいつつあると
思ったら、突然、「高齢者虐待」や「介護疲
れ」という言葉が身近に飛び込んできた
次第です。まさに、家族のライフサイクル
を一つ一つ通っています。

西川 友理

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の

養成をしています。

教員になって初めて担任をした学生が、先日卒業後初めて連絡をしてきました。施設内で色々と仕事を任されており、今フロア主任になって元気にやっています、とのこと。肩書で仕事が決まるわけではないけれど、それでもやっぱり頑張ってきた成果だと思います。嬉しく感じると同時に、「もうあれからそんなになるか…」と時の流れを感じる今日この頃。

この学生は福祉系の進路を希望していたわけではなく、一般企業に就職したはずなのですが、ある時気が付けば障がい者施設で働いていたとのこと。…なんか私が担任した学生ってそういうのが多いです。私の授業は遅効性なのか？…と思ったのですが、私だけではなく、他の先生方も「一般企業にいったん就職して、それから福祉に戻ってくるって子が増えてきた」とおっしゃっていました。なぜこういう人が増えてきているのか？研究すると面白そうなテーマだと思いました。

中島 弘美

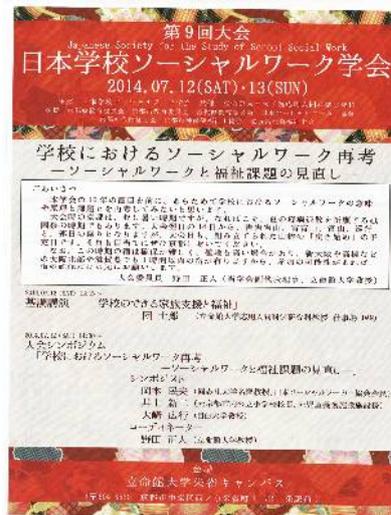
2014年2月京都キャンパスプラザで、対人援助学会第11回研究会「グループの力を借りて問題解決をする体験！リフレクティング・チームをやってみましょう」があり、その様子を千葉さんが前号の編集後記で取り上げていただきました。「もっとやりたかった」「第2弾をして欲しい」「もっとはなしたかった」「これはありがたい経験だ」などの感想をいただき、こちらこそありがとうございました。研究会終了時は頬がほんのり紅く、上機嫌(?)でお帰りだった方もおられたように思いました。その後、援助職をめざす学生さん向けの授業でやってみましたという報告もありました。研究会に参加された方にとって少しでもプラスになることがあったとしたら、喜ばしいことです。

このリフレクティング・チームは、実際にグループでやってみるととても自然な流れでできる作業です。しかし、説明をきいていると、約束事が多くてとっつきにくい気がするかもしれません。それに「リフレクティング」って何かな？と思い、ことばからの

イメージがしにくいですね。ひとことにまとめると、もっとも効果的なのは、「同じグループのメンバーと短時間で相互理解ができる」ことだと思っています。少しは関心をもっていただけたでしょうか。今回の進め方の他に、別バージョンがあります。その特徴は、対人援助にかかわる職場で「準備不要、その場ですぐできるグループ事例検討」です。またの機会にご紹介できればいいなと思っています。

浦田雅夫

2014年7月12日(土)、13日(日)第9回 日本学校ソーシャルワーク学会京都大会が立命館大学朱雀キャンパスで開催されます。



12日は13:15より「学校のできる家族支援と福祉」と題して団士郎(立命館大学大学院応用人間科学研究科教授 仕事場DAN)の基調講演、14:30よりシンポジウム「学校におけるソーシャルワーク再考—ソーシャルワークと福祉課題の見直し—」シンポジストに岡本民夫(同志社大学名誉教授 日本ソーシャルワーカー協会会長)、井上新二(元京都市公立小学校校長、元児童養護施設長)、大崎広行(目白大学教授)、コーディネーターに野田正人(立命館大学教授)。豪華メンバーです。12日のみですと学会員でなくとも、どなたでも1000円でご参加いただけます。ぜひお越しください。詳しくは 日本学校ソーシャルワーク学会HP

<http://www.jsssw.com/>

坊 隆史

最近、足を運ぶことが少なかった昔ながらの商店街で買い物をする機会が増えた。地産地消をウリにしている八百屋の野菜は親近感がわく。地卵の専門店も少々割高ではあるが濃厚な味わいだけでなく日持ちもする。これまで深夜まで営業しており品揃えが豊富なスーパーで買い物をする機会が多かった。商店街は利便性ではスーパーに劣る。しかし生産者や販売者の顔が見える安心感と嬉しさがある。商店街は地域コミュニティの鏡ともいえる。我がコミュニティを知らずしてコミュニティ援助者を名乗るわけにいかない。趣味とフィールドワークを兼ねた商店街散策はまだまだ続きそうだ。

松本 健輔

小学校時代に熱中していた釣りを再開して三年。今年の年始は極寒の琵琶湖にボートを浮かべて、感覚のなくなった手で釣り竿を握っていた。「冬は釣れないけど釣れたらデカイ」なんて、誰が言い出したのか分からない釣り業界のキャッチコピーに踊らされて行ったものの、もちろん釣れる訳もない。

不思議とそれを経験すると、今の時期釣りをしていてどんな悪天候に見舞われても、すごくポジティブな気持ちで釣りができる。「あの日よりました」と。

最悪な状態を一度経験することは、意外と人生の中でプラスに働くこともあるのかもしれない。

カウンセリングルーム HummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com>

牛若 孝治

考え事をしながらバス停でバスを待っていると、よく「大丈夫ですか？」と声を掛けられる。私は、そういうとき、むっとして答える。「何が「大丈夫なんですか？」って?」、「大丈夫ですか？」って、いったいどういうことですか？」などというように。すると、言われた相手は少々困惑しながら答える。「いいえ。何もありません」。その答えに逆上した私は、すかさず相手に畳み掛ける

ように言う。「あなた、「大丈夫ですか？」やなくて、「こんにちは」の挨拶一つできないのか！」すると相手は「ごめんなさい」と謝る。「いや、別に謝ってもらわなくていいから、その「大丈夫ですか？」は止めて下さい。あなたも社会人なんやから、障碍のある人たちに対しても、挨拶ぐらいできないあかん」と親父のようにがみがみ言う私。

「白い杖を見たら積極的に声を掛けてあげましょう」。よくこのようなスローガンを耳にするが、これは私にとっては迷惑だ。なぜなら、私は自分が困ったときは、積極的に声を出すからだ。それに、「大丈夫ですか？」という言い方は、いかにも哀れみや同情を含んだように聞こえるので気分が悪い。「大丈夫ですか？」という言葉でごまかすのではなく、「どこに行かれるのですか？」、「こんにちは」など、社会人としてもっとフットワークの軽い会話をする必要がある。

袴田 洋子

もうすぐ 47 才になります。ずいぶんおばさんになったものです。立派な大人な年齢ですが、ぜんぜん中身が伴っていないと感じて、自分に呆れます。子育ても、後輩育ても、部下育てもしていないことは、こんなにも自分の成長を遅らせるのかと、絶望的にもなりました。そんな中、今年3月、大学院の1年履修のゼミ仲間の卒業旅行で、新幹線の移動中、ゼミ担当教官が自分と同じ年ということが判明し、驚愕しました。あんなに優しく、温和で、専門職としての実践もスゴいなあとと思っていた人が、自分と同じ年。しかも私は7月生まれ。ゼミ教官は10月生まれ。3ヶ月、私の方がお姉さんです。もう嫌になりました。何やってんだらう、あたし、と思いました。そうして、「批判よりも共に成長」を意識できるようになってきました。これもシステム論ですね。

団 遊

ぼくの仕事は「社会問題や企業課題を創造的に解決すること」だと定義しているので、本当に色々な相談が持ち込まれま

す。中には「なんでそれがぼくやねん！」と突っ込みたくなるものもありますが、あらゆるジャンルにある程度対応できるのは、提供している価値がフレームワークの策定までだからではないかと思えます。そんなぼくのもとに最近よく来る依頼が、街づくりや村おこしといった類のもの。そのことに課題感を持つ若手が増えたことと、その状況をアイデアで改善した実例がいくつも報告され始めているのが要因だと思います。例えば B 級グルメグランプリなど、地域活性のいい枠組みですね。そしてその結果、ぼくの地方出張は増える一方なので、このたび鉄道路線図マップを購入し、乗車した路線に色を塗って楽しむことになりました。目指せ日本制覇です。

www.danasobu.com



乾 明紀

本文中にも書きましたが、5月16日に長男が誕生しました。初産にも関わらず予定日より10日も早い誕生で、色んなところにご迷惑をおかけしました。そのご迷惑のひとつが、今回執筆したPBLシンポジウムなのですが、発表の前日の夜に妻が産気づいたため、発表会場である東京には行くことはできませんでした。大学の宣伝にもなるので是非行きたかったのですが、体が一つなのでどうすることもできません。しかし、せつかなのでということで、事務局と協議した結果、急きよ産婦人科の病室からも電話報告となりました。聴衆の反応が見えないプレゼンテーションは薄気味悪い気もしていたのですが、冒頭に事情を述べると温かい拍手が電話越しに聞こえてきました。シンポジウムの聴衆は、若者の未来を真剣に考える人たちばかりですから、そんな方々に祝福され

長男は幸せ者です。発表もトラブルなく無事に終わることができ、思い出に残るエピソードと共に長男の人生がスタートしました。

サトウタツヤ

2014年4月、デンマークのオールボー大学に行ってきました。PBL(問題解決型学習)について、まとめた原稿を書きたかったのですが、時間がとれず、次号でトライすることになりました。5月末、ゼミ生たちが中心になって結成した団体「サトゼミエンタープライズ」が福島県の「若い力による風評対策提案事業」に応募したところ、無事、採択をうけました。「食べた分だけ伝えたい ふくしまベジ食べ×RUプロジェクト」という提案です。学生ならではの取り組みに期待したいと思います。

参考サイトは以下のとおりです。

福島県農林水産部農産物流通課

<http://prw.kyodonews.jp/opn/release/201405311013/>

福島県「若い力による風評対策提案事業」

<http://www.minyu-net.com/news/topic/140601/topic2.html>

大野 睦

今年の屋久島は花がよく咲いている。とても綺麗なあと嬉しい反面、これだけ咲くには理由があるはず。そういえば、ハチの巣も低い。台風の当たり年になるのだろうか。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン
代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長
BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

中村 周平

私事ですが、先日、関西で同じ障がいを持つ方々が集まれる機会があり、そこで、恐縮ながらお話をさせていただきました。テーマは「学生生活」ということで、自身の大学時代を振り返りながら、仲間との

出会い、気づきや学びについて話を。また、そこで、たくさんの方と繋がりを持つことができたことは非常に大きかったです。同じ悩みを抱える存在としてお互いに支えあっていける、そんな関係を築いていきたいと思いました。そして、自分たち「だからこそ」できることを考えていけるのではないかと、という可能性も強く感じていました。

浅田 英輔

何年か前の上司。少し立場が上の人なので面接などの内容を云々されることはなかったが、細かいことに気づく人で、いい男なのに女性陣には不人気だった。

私も「細かいなあ」と思うことはあったが、むしろ好きな上司だった。普段話すことは多くないが、タバココーナーで時々話をした。

その上司に「公務員は、誰でもできる仕事をしなければならぬ」と言われた。当時は、好き勝手なことをしている自分をたしなめたのだと思っていた。「決められたことをやっていたらよい」「余計なことをするな」と言われたと思っていた。多少反発心も芽生えたとし、尊敬している上司も所詮「役人」なのかとも思った。

しかし、年月を経てもその言葉は時々思い出される。年を食ってからもう一度考えると、「オマエのやってる仕事はいいことだ。でも、オマエしかできないのであればダメだ。誰でも出来るようにしろ。」という意味なのではないか。「やっていることを文章化し、手順を、目的を、問題点を明確にし、ブラッシュアップした上で後任に渡せ」という意味なのではないだろうか。

職場に後輩も増えてきて、自分ができなければよいという立場ではなくなってきている。尊敬する上司の言葉を考えなおして、自分のやっていることを整理して、役人の仕事をしていきたいと思う。

中村 正

一般的向けの講演会は極力お断りをしていて、どちらかといえば支援者や援助者と関係ができた、持続的な研鑽の場になったり、こちらも準備に手間をかけて

新しい発見があったりするような場合を選んでお引き受けするようにしている。いろんな学会からのシンポジウムのお誘いも多くあり、他流試合のようで楽しいので出かけていくことが多い。司法関係者からもお誘いいただくことが多い。今年は刑事弁護に携わる弁護士さんたちの依頼で夏の研修を組むことにした。担当の方々とも直接お会いして準備のために3時間ほど話し込み、盛り上がった。テーマは情状弁護における情状とは何かである。被疑者・被告人(悪い奴、加害者であることが多い)の代理人なので、刑事弁護人は「悪魔の代理人」とか「雇われガンマン(用心棒あるいは唱道者)hired Gunman」ともいわれている。話としては、①弁護人は情状を酌量するための論理を構成し、②依頼者に対する誠実義務を果たすために依頼者の主張する真実を追求し、③客観的な意味での真実を積極的に解明する義務はなく、④弁護人は被疑者・被告人の「悔悟」と「更正」を求める国家意思の実現に手を貸すことになるような活動はすべきではないという主流の考えに対して、これでいいかと思っているということだった。企画者である10年目の担当弁護士の問題意識だった。国家権力を相手に、武器をもたない被告のために、量刑において、そうした犯罪に手を染めた情状を考慮し(場合によってはえん罪かもしれないこともあり)、適切な量刑へと導くことが基本であり、積極的真実解明義務がないとまでいわれると、いろいろ考えてみたくなる論点が浮かぶ。被害者のことや事件で傷をおうことになる地域や社会にとってもこれでいいのだろうかという思いが数多く浮かぶ。これは挑戦的な課題だと思い、こちらも勉強せざるを得ないので引き受けることにした。既存のパワポの使い回しではだめなテーマだと思ったからだ。その中堅弁護士のいいたいことを伝えるための「天使の代理人」となるべく、しばらくこれらのことについて勉強することにした。よく見ると、これと同じように主流となっているが疑問を抱くような考え方はたくさんある。身近には家族問題がある。家族は生殖や養育をとおした世代的再生産の場なので基本的に

は親子関係(非血縁関係含む)が軸になる。しかし夫婦関係に振り回されることが多い。縦と横の関係が混線している。同じく司法関係者からの依頼。ハーグ条約が締結され国内法整備で要請されている離婚後の非同居親と子どもの面会が求められているので本当に面会させてよいのかどうか、どのようにすれば面会が可能となるのかについて協力して欲しいという相談があった。これも挑戦的な課題なので研究することにした。夫婦関係に振り回されることになるのが子どもたちである。そうならないように知恵をだしたいと思ったからだ。同僚の村本さん、編集長の団さんにも知恵を借りながら、変な具合に制度化されていかないように知恵をだしたいと思う。こうしたことが重なると、まだまだ基本のところを再考しなければならない事態がたくさんあると思うことが多い。そうしたことが集まってくるのだからそれなりに「結節点」にいるのかと思うと勉強が弾む。

